

平成 28 年度 学術振興基金助成による成果報告書

平成 28 年 10 月 24 日

学 長 殿

所属部局・職名 福島大学人間発達文化学類

申 請 者 名 渡邊 晃一

助成事業の区分 (該当するものに○印)	研究協力に関する事業 (学術出版・叢書・学会等運営・○学会参加) 学術振興に関する事業 (学生・事務職員・その他の特別事業)
事 業 名	大学美術教育学会 (北海道教育大学 札幌校)
事業実施期間	平成 28 年 9 月 24 日 ~ 平成 28 年 9 月 25 日
成 果 の 概 要	<p>口頭発表 『3D画像としての《モナ・リザ》 ~絵画と両眼視差との関わりからの一考察~』</p> <p>レオナルド・ダ・ヴィンチは、「自然現象を研究する学問が数多くある中で、光を研究する学問ほど、学ぶ者に喜びを与えてくれるものはない」と述べました。彼は「光」を介した、さまざまな3Dの遠近法を生み出すと同時に、それを自然の観察と結びつけてきた。</p> <p>2014年、《モナ・リザ》を世界最初の3D画像の「実体鏡・ステレオグラム」とする説が発表された。ドイツの視覚科学者カーボンと心理学者ヘスリンガーは、ルーヴルとプラドにある二つの《モナ・リザ》の視点のズレに着目し、その画像分析から、両作品は左右の目から描かれた「ステレオグラム」であると論じた。</p> <p>もし《モナ・リザ》が両眼視差の原理によって描かれた「ステレオグラム」とするならば、素描との関係が見逃せない。本発表では、それを実証する上で、素描を重視したレオナルドが、下絵の段階で投射装置によるトレースや、写真のような単眼視を関与させたと考え、モデルを作成した。</p> <p>3Dの《モナ・リザ》は「芸術には技術が必要だが、技術は芸術ではない」という側面も想起させる。本研究では、「芸術(アート)」と「技術(テクネ)」の間からレオナルドの《モナ・リザ》を探るなかで、前者には、身体と自然による「美」と深く関わった「生命」を受け取ることができることを示した。</p>